

J I A 新人賞受賞した宮晶子さん

10年度日本建築家協会(J I A)新人賞に、「house K」(横浜市、08年)を設計した宮晶子氏(STUDIO 2A)と、「House C 一階の家」(千葉県、08年)の設計を手掛けた中村拓志氏(N A P 建築設計事務所)が選ばれた。才能に恵まれ、真摯に努力している建築家を、その作品を通じて顕彰するJ I A 新人賞。10年度の受賞者にその喜びと建築への思いを聞いた。第1回は、さまざまな関係が常に変化する動的な建築のあり方を模索し続けている宮氏に登場してもらった。(編集部・山口裕照)

人が主体となる建築を目指す

— 受賞の感想を。

「空間が主役ではなく、人と人と場所、人と空間などの関係性や感じ方など、常に人が主体となる建築を考え続けています。『house K』は竣工から約3年が経ち、新しい住まい方や人との関係が生まれている。こうした点が評価されて大変うれしく思います」

— 設計のコンセプトは。

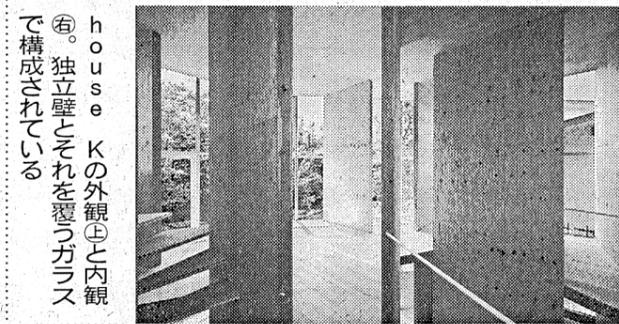
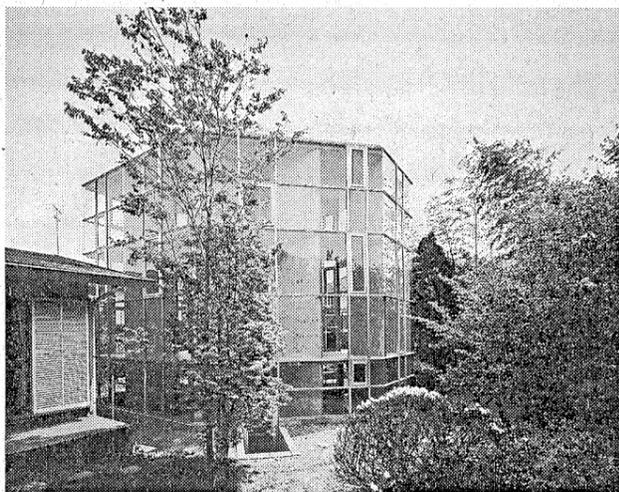
「デビュー作の『那須の山荘』(栃木県那須町、98年)では、環境から切り取って生まれる空間ではなく、環境と一体的になりながら、壁の近傍に生まれる場所や物陰がつくる見え隠れによって居場所をつくり出しました。開くと閉じるの中立の状態に壁を配置することで、家の中と中、中と外、人と人、人との周辺関係が常に変化する動的な場をもたらす。この発想を原点に、人と人の関係を

より深化させてきました」

— どのように建築を構築したのか。

「建築を計画する時、敷地をよりどころに座標軸を決めることが一般的ですが、ここでは、敷地境界から離れた座標を探しました。具体的には局所から全体を共時的に展望できる極座標を用いて考えます。座標の交点を隙間にし、軸上に壁を置く。13枚の独立壁は座標の法則に沿って配置されていますが、視線の方向によってさまざまな風景が出現し、たくさんの関係性が生まれます。幾何学的法則の中で、偶発的な良きを見つけ出し、計画に取り込みながら、内と外を同時に形づくっていきま

house K



house Kの外観①と内観②。独立壁とそれを覆うガラスで構成されている

「住み始めると壁の存在が消えていきます。壁よりも、その中で流動的な生活に目が向きます。壁は漫画でいえばコマとコマの間の余白、間白です。壁による緩やかなゾーニングは、領域を分けると同時に混ぜ合わせ、つなげます。」

— 環境面はどうか。

「独立壁とそれを覆うガラスで家族の変化や日々の気分の変化に応じて、最適な暮らし方や居場所

みや・あきこ 1986年日本女子大家政学部住居学科卒。レノンド設計事務所、アルテック建築研究所を経て、97年STUDIO 2A設立。横浜国大、東海大の非常勤講師。主な作品に「那須の山荘」「house I」など。主な受賞歴に栃木県マロニエ建築奨励賞(99年)、AMERICAN WOOD DESIGN CITATION AWARD(00年)、SD Review入選(04年)、杉コレクション優秀賞(同)、新建築賞(10年)など。

をつかい手が見つける。そのような許容力のあるスケルトンを土地の特性を生かし緩く用意しておく。設計者の影が消え、住む人の本能的な部分に働き掛け、創造的に果作りできる素地となれば本望です」

— 今後の活動は。

「これまで考えてきたことをさまざまな建物に展開したい。個と集が両立でき、空間として完結するのではない、意識としての開放性がある場をつくりたいと思っています」。